



MARIANISTES

—— マリアニスト ——

“私の思いは あなたたちの思いを 高く超えている”

汚れなきマリア修道会 Sr.伊藤 昌子

わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
私の道はあなたたちの道と異なると
主は言われる。
天が地を高く越えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。」

(イザヤ 55 章 8-9 節)

最近、この聖書の言葉が妙に心にかかり、しばしば思い巡らしておりました。神の思いと私たちの思いとの間には何と大きな隔りがあることでしょうか。来年、汚れなきマリア修道会は来日 60 周年を迎えます。日本管区が 30 周年を祝ったその年に、Sr. 高尾と Sr. 大堀が韓国に派遣されて創立された韓国の FMI (汚れなきマリア修道会) が来年の 5 月にはや 30 周年を迎えるとは只ただ神のなされる偉大な御業を讃え感謝するのみです。さらに喜ばしいことに、インドでの創立にあたり韓国の姉妹も二人インドに派遣され、インターナショナル共同体に若い志願者たちが少しずつ入会しつつあることです。シャミナード師とメル・アデルから受け継いだマリアニストの精神とカリスマを分かち合って生きる家族が増加していくことは何と大きな喜びでしょうか。

Sr. アランザスと Sr. イニヤスを通して私たちへ、さらにコレアの姉妹達からインドの若者達へ、そして神様は私たちの協力を期待なさりながらとどまることなく、ご自分のご計画をこれからも進めていかれることでしょう。

さて、話は変わり私事になりますが、北海道の中央に位置する旭川の近くの小さな町

で生まれ育った私は、キリスト教とはほとんど縁のない環境で成長し、将来は良い人を見つけて結婚し、両親の世話も引き受け、幸せな家庭を築こうと、ごく平凡な生涯を夢見ておりました。しかし、ミッションスクールで神の存在を知り、キリストと出会ったのが運のつきとなり、私の将来は見事に方向転換をさせられることになったのです。受洗以前から修道生活を望み、入会まで 5 年間、キリスト教をよく知らない家族、親戚、友人から「キリスト教は愛の宗教だというのに、どうして親を捨てて修道院に行くのか」との批難めいた言葉に心痛む時もありました。周囲に自分の思いを理解してくれる人もなく、ひたすら神に寄り縋っていたあの時代は、私にとって信仰の試練の時であり、同時により堅固な信仰の人となるよう導いてくださる神の恵みの時であったと今は感謝しております。

“神にはお出来にならないことは何一つありません”と、マリアに告げられたこの言葉を信じて待つ時、人間の常識では不可能と思われることも、神のみ旨ならば必ず実現させてくださるということを経験させていただきました。マリアのフィアトによって彼女の生涯が人の思いを高く超えた神の計り知れない救いのみ業の実現へと組み込まれていったように、これからのマリアニストの奉獻生活の歩みにおいても、マリアの娘として母に倣う生き方を最後まで求めて生きたいと願い、日々、マリアへの奉獻を新たにしております。

母マリアとともにすべてをより大いなる神の栄光のために！！

マリアニスト日韓交流会に参加して

マリア会司祭 烏山助雄

今回のマリア会終生誓願者の日韓交流会は、日本地区がホスト役で、韓国から10名を迎えた。会場と宿泊は東京のシャミナード修道院、8月25～28日の4日間だった。当修道院の長である私も、傍観するわけにもいかず参加した。

言葉の壁は厚く、交流会の妨げとなったが、その分、通訳者のご苦勞は大変であったと思う。国情は異なっている、カトリックの同じ修道会として、相互の理解や協力一致をこの様な地味な底辺からの交流を通して作り上げたい。その為、相互に相手の国を訪問し、自分自身の目で観て、理解の第一歩を踏み出すことが最も手取り早い道だと改めて思った。

東京と京都を一緒に駆け足で観光したが、一行は大変満足していたように見えた。日程の都合で、ある一つのテーマについて意見交換する時間が充分でなかったことが悔やまれる。

この交流会は、交互にホスト役を務めることになっている。日本地区からの自発的な参加希望者は多くはないようである。日本地区の会員の高齢化がこの様な交流に対しての関心度を低下させているのかもしれない。交流会を継続させる為には、比較的若い会員達の参加が望まれる。とは言え、若い会員も多くはないので、各会員がいかように決断して参加するかが問われており、今後の検討課題でもある。交流会の前途には幾多の問題が予想される。継続する中で、共に考えて解決を見出し、両国にとって望ましい結果が生じることを期待するのみである。

マリアさまのように Fiat...

Sr. レジナ金春玉 (キムチョンク)

私は、8月31日に終生請願宣立のお恵みをいただき、その時奉げた祈りが今も続いています。「今日行われるすべてのことが私の小さい身体を通して、マリア様の香として出会う人々にただよわせることができますように」と。

誓願式に向けて使徒職の現場から3ヶ月間離れて準備の時が与えられ、「サラゴサの精神による一カ月の霊操」をしました。最初、この期間どのように行われるか、感謝しながらも一抹の不安がありましたが、心の中で神様はいつも最高のプレゼントをくださるとの確信の中で信頼と希望を持って入りました。

この間にいただいた数々のお恵みの中で創立者メールアデルの『私のすべてのものは神のものです。神様に余すことなく自分を捧げることは何という幸せでしょう』との言葉は私の心に響き、私もそのように神様のお導きと聖霊の働きに期待しながら過ごしました。

両創立者の神様への信仰とマリア様に対する愛を黙想し、いつもマリア様は私たちを養い育て、イエス・キリストの似姿に形造ってくださいること。そして、すべての人がイエスの姿になることを願いながらマリアの子として日々喜びの中で生きるようにと私を呼んでくださることを大変幸せに思います。

マリア様が「私は主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」と喜びをもって全生涯を神様に明け渡したように、私もマリアと共にそうありたいと願っています。そして、これからもマリア様を知らせ、愛させ、マリア様の使命を果していきたいと思えます。



連載 マリアへの奉獻 (7)

《聖母マリアの奉獻》 (つづき 4)

マリア会司祭 富来 正博

イエスの最初の「しるし」の引き金となったのがマリアの「ぶどう酒がなくなりました」という言葉でした。前回この言葉が信仰の表明であることを考察しましたが、福音書には、この最初のしるしによって、「弟子たちはイエスを信じた」と書かれています。このところを、マリアの信仰が弟子たちの信仰を引き起こしたと考えることはできないでしょうか。

ところでイエスを信じた弟子たちの信仰とはどのようなものだったのでしょうか。不思議な出来事を見たから信じるようになったのでしょうか。だとすれば、皆が信じるようになるために不思議なことを沢山行えばよいということになります。これは、イエスを信じなかったイエスの兄弟たちの発想です。「イエスの兄弟たちが言った。「ここを去ってユダヤに行きあなたのおしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。」兄弟たちもイエスを信じていなかったのである」(ヨハネ7章3～5節)。イエスの兄弟たち、すなわち親戚の者たちはイエスのなさった不思議なことを知ってはいたでしょうし、なかには見たものもいたでしょう。しかし信じるにはいたりませんでした。

ヨハネは水がぶどう酒に変えられたことを「しるし」と呼んで、奇跡とは書いていません。「しるし」とは、直接に見たり触れたりすることのできないものを表すものです。ヨハネが「しるし」と呼ぶものは、イエスがメシアであることを表わすものです。

五つのパンで5000人の人を満足させた事跡の後、人々はイエスを捜し求めますが、それに対してイエスは「あなたがたがわたしを捜しているのはしるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」(ヨハネ6章26節)とお答えになります。そして少

し後で「あなたがたはわたしを見ているのに、信じない」といわれます(36節)。

イエスを信じるということは人間のうちから自然に生まれるものではなく、神の働きによることが、ヨハネ6章38節～40節の雨宮慧神父様の解説でよく理解できます。

「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」(ヨハネ6章38節～40節)。ここで、「子を見て信じる者」と(父が)「わたし(子、イエス)に与えてくださった人」が同じものであることは明白であり、したがって「子を見て信じる」ことは父が与えてくださらなければならないことだと結論付けることができます。

(主日の聖書解説A年、死者の日参照)

ヨハネ福音書の序文には、「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである」(ヨハネ1章12節～13節)とあります。神の子となる資格を与える信仰、それは、父の御心を行うために天から降ってきた御子の完全な模倣を心がけられたマリアの信仰ではなかったのでしょうか。そして、このマリアの取次ぎによって最初の弟子たちはイエスを信じるようになったのです。そして信仰の共同体が出現しました。その先頭にマリアがおられました。「この後、イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下って行き、そこに幾日か滞在された」(ヨハネ2章12節)。



2009年

マリアニスト家族の集い

日時：2009年1月18日（日）

会場：調布・晃華学園

【詳細は、各所属グループを通して、
また、本紙次号（1月号）にてお知
らせいたします。】

MLC 黙想会のご案内

日時：11月28日（金）～29日（土）

指導：朝山宗路師（マリア会）

「マリアの素描について」

Sr. 田中昌子（汚れなきマリア修道会）

「主よ、来て下さい」

場所：町田修道院

費用：一泊参加（4食付）7000円

一日参加（昼食付）1500円

両日通い参加（昼食付）3000円

※参加ご希望の方は、各グループ代表を
通してお申し込みください。

MLC 霊生部・石井

祈りのひととき

主のもとに憩う

一日の仕事を終え、心も体もほっと
して家路につくひととき、月に一度、
足を向けてみませんか。

毎週第3水曜日 pm 7:30～8:30

2008年 11/19、12/17

2009年 1/21、2/18

3/18 以下続く

*会場：シャミナード修道院聖堂

〒102-0071 千代田区富士見 1-2-43

*担当：清水一男神父

*問い合わせ：シスター小林 08051883081

*参加を希望される方は、特に申込の必要
はありません。当日直接お越しください。

◆ 編集後記 ◆

11月は死者の月。最近、身近な命
を喪った者として、死の影響について
考えてみたくなりました。我が編集部
も去年、家長ともいべき小原前編集
長を亡くしています。

死の現実に向き合って、悲しみの底
にある人に対しては、一切の言葉は
無力だというのが僕の自論でした。し
かし、今では、そうではないと思うに至
りました。本気で人の苦しみを我が物
として、精神的に寄り添ってくれる人
の言葉。それは、いかに拙いものであ
っても、打ちひしがれている者にとつ
て、大きな救いと支えになるのだと実
感できたからです。さらには、これ迄考
えてもみなかった死の積極的な意味に
ついてさえ教えてくれるからです。

この他者の苦しみに寄り添う姿勢の
ことを、ある人は、キリストの行為と
して、「トコトン」と表現していました
つけ。（K. U.）

お詫び

今回、紙面の都合で、古畑久美子
さんの「韓国巡礼—その2」は、
次号に掲載させていただきます。

発行 『マリアニスト』編集部

気付 「汚れなきマリア修道会」

町田修道院 清水一男神父

〒194-0032

東京都町田市本町田 3050-1

TEL 042(722)6301

FAX 042(725)6317

ホームページ

<http://www.marianist.jp/>